
君とあたしの今までを

もにか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君とあたしの今までを

【Nコード】

N6811V

【作者名】

もにか

【あらすじ】

今でも「運命」って信じてるよ。

出会いなんて一期一会なのに

君はあたしを選んでくれた。

出会い×コンビニ

片瀬 祥子。^{しんご} 18歳。

夏休みも終わって9月の終わり。

コンビニでバイトをしていたある土曜日。

「いらっしゃいませー」

(あと10分で終わるのに…立ち読みは勘弁してよね…)

そんな事を思いながら、レジに立っていた。

「あの…。」

「はい。ありがとうございます。」

商品をスキャンしようとした。…が商品を持っていない。

「…?」

顔を上げて客の顔を見た。

「これ…お願いします。」

小さな紙切れを渡してきた。

すぐにそれが何なのか理解し、私の顔が赤くなる。

「あつ…彼氏とかいます…?」
「いえ…いない…です…けど…」

どっどん声が小さくなるのが自分でも分かった。

「良かった…じゃあ連絡待ってます。」

そう言い残し、彼は店を出て行った。

その日の夜は眠れなかった。

だってアドレスもらっの初めてだったんだから…

.....

翌日。

結局メールはできなかった。

(これはからかってんのか…いや体目当てに回りくどい事をしてい
るのかも。女子高生を馬鹿にしてるな?…でも…それならこんな田
舎のコンビニにはこないはず…まさか、田舎だからなのか…?) 以
下エンドレス

おかげで寝不足。休日のみバイトは身が入らず。

その日のバイトが終わってから、アドレスの書かれた紙を眺めた。
恥ずかしくて、なんとなく開いていなかった。

「メールできるもんならしてみな！…してください。」
XXXXXXXXXX@XXXX
000-00000-00000

(ミクシイみたいな感じで、メールしちゃおっかな…)
アドレスを入力し、本文を書き込む。

(ギャル文字は使わないほうがいいよね…。短めの文にして、その気はないようにして…)

あれこれ考えて、適当に猫の絵文字も入れて送信した。

(…送っちゃった！無視されないよね？)

ハラハラしながら待つこと20分。

「メールくれてまじでありがとう！俺は戸田 ゆうだい 雄大ゆうだいって言います。
23歳です！よろしくね」

返事がきた。そしてさわやかな返事。

(はぁ…ドキドキする…)

またメールを送った。

また20分後に返ってきた。

また送ったが、その日はもうメールは返ってこなかった。

メール×大人（前書き）

何も知らない。

顔も覚えていなければ、声も何もかも。

君のこと知りたいのに…

メールの返事がなかなか来ない。

メール×大人

それから1日1通返事がくるようになった。

すぐに返事を送っても、彼のメールは次の日まで来ない。

1日1通だからなのか、ありえない長文だった。

長文は苦手だったけど、楽しかった。

彼は祥子の知らない事を知っていた。

大学の話。大学生とはこういうものと思い込んでいたから、彼が話す大学生活は本当に楽しそうだった。

祥子にはそれだけで大人に感じた。

今まで付き合ってきたのは同い年の人ばかり。

ただでさえ5つも離れている年上の彼に、いろんな事を教わった気がした。

そうして1カ月が過ぎた。

彼の事は親友の美穂にすら話せないでいた。
なんとなく、言えなかった。

そんなある日、彼からきたメールの最後の1行。

「よかつたら、今度ごはん食べに行かない？」

…ええ?!

ごはんって事は…会ったよね、彼と。

正直、祥子の中の雄大は
存在こそ大きいものの、メル友という範囲だった。

会ってみたいけど…怖いし…

またぐるぐると考えに考えたけど、答えは見つからなかった。

「ねえ…美穂」

「…なに？」

「今メールしてる人がいるんだけど…ごはん誘われたんだよ…」
「ふーん…」
「…行つていいと思うっ?」

「え?…行けば?」
「へ?」

あまりにも普通に言うからびっくりした。

「だつてメル友だよ?」
「うん」
「怖くないの?」
「だつてさおりもそーゆう事あつて、ごはん食べたけどなんもなかつたつて。」

「…そうなの?」
「…そうなの。」

「祥子は進展したいの?その人と。」
「…うん。」
「じゃあ行つといで」

「…うん!また経過報告する!」
「むしろ何で今まで言わなかったのー?」

少し拗ねたように美穂が言った。

それから、雄大君のことをすべて話した。

美穂はうんうんと聞いてくれた。

その夜、雄大君への返事の最後の1行に

「ごはん食べに行こうか！」

と入力して送っておいた。

ごはん×大人(前書き)

車でお迎え!

すごい!

大人ってかっこいい…

ごはん×大人

10月22日

「着いたよー。黒い車。」
彼からメールが来た。

コンビニを出て駐車場を見渡した。

(黒い車…たくさんあるし…)

1台の運転席の人がこちらをみている。

「あれだっ。」

その車の助手席に駆け寄って、運転席を覗き込むと
助手席の荷物をどかしてくれたので、ドアを開けた。

「おまたせ〜」

「お願いします。」

「…え？」

「え？…お願いします…？」

彼はマフラーを巻いていて口元は良く見えなかったけど
やさしそうなたれ目だった。

それから今から行くお店の事とか、今日は教授がどつどつ……。話題を尽くさないように、おもしろおかしく話してくれた。

お店に到着して、1時間ほど並んだ。外で待っていたのだけど、お店の人がメニューを持ってきてくれたので2人で眺めていた。

「ボンゴレ…ぼんごれってなんだろう？」
カチカチ…

「ボンゴレ…あさり…ドイツ語だね」

彼は自分もわからない事は携帯を使ってでも教えてくれた。

(この人はアホかもしれない)

そう思いながらも、大げさに調べたりしてくれるのですごく笑った。

ようやく席に着き、料理がきた。

「そっぴや俺は祥子ちゃんって呼んでるけど、祥子ちゃんは俺の事呼ばないよね。」

「えっ?!…なんて呼べばいいかわかんないし…」

「みんなは雄大って呼んでるよ」

「でも年上だから呼び捨てはできないな」

「そうかー…」

「じゃあ雄君って呼ぶよ！雄君でいい？」

「自由に」

雄君はにっこり笑ってそう言ってくれた。

すごく楽しくて、あつという間に21:30。

祥子の家は門限が22時なので帰らなければいけない。

帰りの車の中で

「今日は祥子ちゃんにひとつ言いたいことがあるんだよね」

「…なに？」

「メール返してくれて本当にありがとう。」

「え？…うん」

「正直メール来ないかなーって思ってたからさ」

雄君は苦笑いしながら話してくれた。

そして家に着いてしまった。

「送ってくれてありがとう。」

「いやいや、気をつけてね。」

「…またね？」

彼は何も言わずに手を振ると、行ってしまった。

ハンバーグ×次回（前書き）

次はいつ会えるの？

約束しなきゃ不安だよ…

ハンバーグ×次回

11月7日

2回目のデートは放課後、JKを武器に制服姿を見てほしくて
「文化祭の準備で制服のままになっちゃう。」
とか言っつて、駅まで迎えに来てもらった。

雄君にどう思われたかはわからない。

ただ、相変わらずドキドキはしていた。

「ハンバーグが食べたいんだよね？」
「うん！」

ハンバーグが評判のお店へ連れて行ってくれた。

前回は今回もデート（？）コースを調べてくれる。
そーいう大人みたいなデートの仕方にも、惹かれていた。

だがしかし、今回は2回目という事もあって、祥子は一味違った。

次回のデートを予約しようと考えていた。

これも美穂との作戦である。

「今度見たい映画があるんだー」

「なんの映画？」

「阿部サダヲの泣くもんか！」

「あークドカンのやつねー」

「（クドカン…？）それで…今度それ見たいんだけど…」

「うん。いいよ。見ようか」

相変わらず雄君はニコニコしながら答えてくれた。

すごく嬉しかった。

自分が勇気を出せた事も、また雄君とデートできることも。

帰宅してから、美穂に電話で報告した。

美穂も喜んでくれた。

翌日。思いがけないやつからメールがきた。

元彼のたくやからだった。

元彼×今の恋(前書き)

今更…

なんなの…？

どうしたらいいのか

わかんないよ

元彼×今の恋

「久しぶり。今更何だか思ってると思うけど、これだけ言っておきたかったんだ。祥子のおかげで、野球も勉強もがんばれたんだ。本当に。すごく感謝してる。ありがとう。」

(…今更言われたって…)

確かにたくやと別れて1カ月程引きずった。

でも、1カ月ぶりにたくやの所属する野球チームのブログを見るとそこには元カノが試合の応援に行ったら嬉しい書き込みとそれに対するたくやのコメントがあった。

すごくショックと同時に、たくやへの煮え切らなかつた気持ちも一気にさめた。

(…美穂に相談しよう!)

一通り話してみると

「それは狙ってると思うよ？祥子からの返事をきっかけにヨリを戻そうとしてるのかも…」

「それは困る」

何で困ると思ったのか分からないが、考えるより先に言葉が出た。

同時に雄君の顔も思い浮かんだ。

「…今なぜか雄君の顔が出てきた。」

「まじで？それは好きってゆう証拠だね。」

「…」

(…もうすぐ映画の公開日だね)

「とりあえず、たくやは無視しとく。」

「それがいいよ。」

このメール以来、たくやからはメールは来なかった。

映画×ミス(前書き)

やっぱり好き!

こんなにドキドキするのに

嘘なんてつけないでしょう?

映画×ミス

12月6日

もうマフラーなしでは外に出れない。

でも祥子はマフラーが大好き。

だって可愛く見える…と思う。

彼に会うときも、可愛くいたいから。

マフラーは外せません。

「…(行つてきまーす)」

お母さんには内緒。

内緒で出かけて、内緒で帰ってくるの。

じやなきやいちいちづるさくて敵わない。

コンコン、ガチャッ

車のドアを開けて、助手席に乗り込む。

「お迎えいつもありがとう」

「いやいや、車だしね」

今では家の前まで迎えに来てくれるようになった。

相変わらずメールは1日1通だけど。

付き合ってるわけでもないから、文句も何も言えない。

でもマイペースでいいんだよって自分に言い聞かせてた。

「今日の映画、18：43からのでよかった？」

「うん！ずっと見たかったから楽しみ」

映画館に到着し、チケットは彼が買ってくれた。

というかクレジット？で買ったらしく、こちらが払う隙が無かった。

「あの…チケットありがとう」

彼はにこっと笑うと、飲み物を買いに行った。

(飲み物くらいは自分で買わなきゃ…)

自分で払うと、彼は少し戸惑っていた。

「飲み物…俺が買ってあげなくてごめん」

え?!

何故そんな事を言っただろう…

これは男を立てるのを忘れたのか…?!

「別にそんな事思っただけだよ？」

彼はまたにこっと笑った。

あたしはそのにこっとした彼の笑顔が大好きだった。

すごく安心できるような笑顔だから…。

それに笑うとくしゃっとなる所とかね〜

映画は完全にチヨイスミスだった。

恋愛ものだとキスシーンとか気まずいって思ったから

あえてバラエティー選んだのに…

予想以上の下ネタにきつと彼もドン引きだったと思う。

大学生×高校生（前書き）

あたしはまだまだ子供だよ…

もっと大人っぽくなりたい！

大学生×高校生

映画のあとは、イタリアンを食べに連れて行ってくれた。

なんだかおしゃれすぎる所で、

向こうのテーブルでは女子大生6人くらいが

楽しそうに話していた。

(すごい…お店の雰囲気も、あの人たちも大人っぽい…)

それに比べてあたしときたら…

なんともいえない酷い格好のような気がしてきて

すごく恥ずかしくなった。

彼との会話も耳に入らない。

ずっともじもじしていた気がする。

お店を出て、ようやく彼の車に乗って安心した。

それからまた、いつものように家の近くまで送ってくれた。

車を降りようとしたら、パトカーがサイレンを鳴らしながら通り過ぎていった。

「わっ、こんな時間にパトカーって…」

「もう少し車にいたら？」

彼がそう言ってくれたのでありがたかった。

それから路駐でハザードを点けたまま、車内で話した。

5分くらいしてから帰宅した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6811v/>

君とあたしの今までを

2011年10月9日13時46分発行